外務委員会報告

名古屋大学名誉教授 坂田 誠
 東京工業大学 佐々木聡
 いわき明星大学 竹中章郎
 京都大学 三木邦夫
 理化学研究所 高田昌樹
 熊本大学 吉朝 朗

Makoto SAKATA, Satoshi SASAKI, Akio TAKENAKA, Kunio MIKI, Masaki TAKATA
 and Akira YOSHIASA: Report from Public Relations Committee

はじめに

本特集号に、組織委員長事務局長の甲斐先生がお書きになった記事の中の図1にIUCr2008組織委員会構成図が載っている。構成図よりわかるように、幹事会の下に外務委員会が設けられた。外務委員会の傘下には、最終的に6つの小委員会が組織された。この記事は、主に外務委員会を通して見たIUCr2008の報告である。構成図を見ると、整然とことが運んだように思われるかもしれないが、実態は必要に応じて必要なことを実状に即して行ってきたということが正直なところで、報告とは言うものの、外務委員会を通して見たIUCr2008の風景のような感があるものと思う。

結果的には、外務委員会は、まだ、IUCr2008という巨大な会議の全体の姿が現れる前に活動が活発になり、全容が現れるに従って活動が収束していったように思う。いわばIUCr2008という衛星を軌道に乗せるのが、一番の大きな仕事であったように思う。しかし、数千人規模の会議を軌道に乗せるということは、委員の誰も経験したことのないことで、戸惑うことも非常に多かった。また、外務委員会に所属する小委員会の活動は、独立性が高く、大きな方針を外務委員会で決めた後は、個々の小委員会の活動に委ねたため、この報告は、各小委員会委員長の共同執筆とし、全体を外務委員会委員長が取りまとめるという形式とした。

外務委員会

外務委員会が組織された当初、一体何をどうすれば良いのか、まったく見通しが立たなかった。まだまだ、IUCr2008は先だという思いとそろそろ何か動き始めなければいけないのではないかと、という思いの交錯する中、

第1回目の外務委員会を、2006年10月25日に開催した。2006年7月8日に開催された第1回IUCr2008組織委員会幹事会が実質上の組織委員会活動のスタートとするなら、それに遅れること3カ月後のスタートである。何も実体がない中での議論で、想像上の動物をどう飼育するかというような議論であったのかもしれないと、今は感じている。

第1回目の会議の特徴としては、小委員会の名前が2つ変わったことであろう。募金小委員会が企画小委員会に、プレ・ポストカンファレンス小委員会がサテライト会議小委員会に変更になった。当時、市民公開講座小委員会は、まだ存在せず、2007年4月13日の第3回外務委員会で事実上発足が決まった。これは、日本学術会議との共同主催の合意書締結のため、市民公開講座の責任体制をはっきりさせる必要があり、組織委員会としては外務委員会傘下の1つの小委員会として、位置づけることが最適であろうと判断したためである。

外務委員会としては、都合6回の委員会を開催した。それぞれの委員会で何を討議したかは、表1にまとめた。表からわかるように、最後の外務委員会は、2008年2月19日に開催された。本格的に、参加登録が始まる時期である。実際の会議の活動が、本格化する時期をもって、外務委員会全体としての活動は収束した。もちろん、市民公開講座小委員会のように、会議の当日まできわめて多忙な小委員会もあったことは言うまでもない。今、振り返ると外務委員会としての重要な役割の1つは、大小問わず意思決定と決定された事柄の責任体制の構築であったように感じる。責任体制と言っても組織というよりは個人の問題で、ほとんどの場合は、責任者を決めることになってしまったかもしれない。責任をもっていただいた個人の自覚により、会議をタイミングよく軌道にうま

表1 外務委員会の開催日時・場所と主な審議内容. (Main agenda, Dates and Places of Public Relations Committee.)

委員会	開催日時	開催場所
第1回外務委員会	2006.10.25	名古屋大学
各小委員会の設置と役割分担の決定, 参加登録案の作成, 重要日程についての確認作業		
第2回外務委員会	2007.3.30	名古屋大学
募金活動の進捗情報, 公的な援助申請および寄付依頼リスト作成, 学協会への後援依頼, 企業展示期間と案内, サテライト会議開催, 参加登録と概要登録のweb化, 一般市民向け講座の検討		
第3回外務委員会	2007.4.13	東京工業大学
寄付の免税措置, 広告および企業展示の進捗状況, サテライト会議への支援強化策, 後援団体の増強, 市民公開講座小委員会の設置, 学術会議国際小分科委員の推薦, 参加登録方法の再検討		
第4回外務委員会	2007.6.6	名古屋大学
募金活動の現状と今後の進め方, 企業展示のフロアプラン, ランチョンの導入, サテライト会議の現状把握と若手援助, 会議準備資金の状況, 参加登録費の検討と懇親会		
第5回外務委員会	2007.10.4	(株)コングレ大阪本社
募金活動の進捗状況, 市民公開講座と60周年記念講演会, Second Circularの最終確認, 協賛品募集, 企業展示, 企業広告サテライト会議の登録と支援の状況確認		
第6回外務委員会	2008.2.19	(株)コングレ大阪本社
事前参加登録および演題登録の状況, 募金状況, 展示の状況, ランチョンセミナー詳細決定, 市民公開講座の進捗状況, その他会期中配布物の規定・ドリンクサービス・ネームカード・ランチサービスなどの詳細を決定		

く乗せることを助けられたのではないと思う。

企業展示を例にとって見ると、まず、原案の段階では、紙面上はきわめて整然と多数のブースが並んでいたが、大きなブースを欲しがるところもあれば、小さなブースを望むところもある。一体何社が企業展示に応じてくれるのか、必ずしも確かな予測があるわけではない。しかも、できることならすべての出展企業が、最も人が集中する会場の中央付近のブースを希望するのは、明白であった。不確定要素がたくさんあり、種々の事情が絡んだ中で、意思決定をするのは、必ずしも容易ではない。会議運営会社も含めていろいろなアイデアを出し、有力な企業とは直接会い、最終的な決定権は組織委員会に属するとの原則を確立した。大方の関係者の満足のいく企業展示を行うことができた裏には、企業展示小委員会をはじめとする多くの方々の協力によるところである。その一番大きなところでのかじ取りをしたのが、外務委員であったとご理解いただきたい。

学協会対応小委員会は、事務局の中の広報小委員が広報に努めてくれたこと、あるいは、誘致委員会のころから関連学会のご協力をいただいていたこともあり、組織委員会が立ち上がった後では、特に、大きな活動は行わなかった。企業展示小委員会、学協会対応小委員会以外の小委員会については、独自の活動を行っているので章を改めて書くことにする。

企画小委員会

本委員会は当初、募金委員会の名称でスタートした。委員長に大隅一政（元会長）が就任したが、米国在住となったために竹中章郎（現会長）が交代することになった。委員会メンバーは、青山剛三（コングレ）、雨宮慶幸、大隅日本結晶学会誌 第51巻 第1号（2009）

一政、大橋裕二、上村みどり、郷 信広、坂田 誠、佐々木聡、高田昌樹、月原富武、三木邦夫、村井眞二（JST）、藤井保彦、山根 隆の諸氏で構成された。

まず月原委員の提案で、大橋、月原、青山委員が日本製薬団体連合会に募金の依頼に訪問し、援助が得られる見込みとなった。その際、日本経済団体連合会（経団連）に正式に募金依頼することが必要であること、寄付金を無税扱いとするためには公的な寄付金受入れ団体を設けるべきであるとの助言も得た。また大阪コンベンション協会、大阪万博協会にも寄付依頼を行うこととした。

上記の助言に基づいて、寄付金を集めるための体制を早急に確立することであった。具体的には、募金趣意書を完成させること、および寄付金に免税を受けるための申請を日本学術振興会（JSPS）に提出することであった。そのためには、国際会議の目的と意義、歴史、規模、実績、会議の内容、プログラム、参加予定者名簿などに加えて、寄付金（総額3000万円）を必要とする理由、全体予算の概要と詳細書、寄付金の使途、各種委員会名簿などを所定の形式で作成しなければならず、千代田区一番町のJSPSに何度か通い、担当者の指示に従って完成させた。起案から数カ月を経過して趣意書の小冊子が完成し、その500部がJSPSから送られてきたので、これを用いて募金活動を開始することになった。

その戦略を練るために、第1回企画小委員会を2008年7月6日に東京工業大学百年記念館（大岡山キャンパス）で開催し、いよいよ経団連を訪問することになった。郷委員から内藤記念科学振興財団に応募する提案があり、申請を甲斐（事務局長）に依頼した。後日、満額の支援をいただくことになった。一方、千代田区大手町の経団連総務本部に電話で趣旨を説明すると会ってくれるという

ので、7月20日に大橋、月原、青山委員と事前打ち合わせをして訪問した。結晶学の説明から始まり、いかに重要な学問領域であるかを説明し、日本で開催することの意義、日本学術会議との共催であること、産業界や経済界に及ぼし得る効果などについて、わかりやすく説明した結果、協力してくれることになった。

2週間後に連絡があり、大橋委員と2人で再訪すると、総額4000万円を所属30団体と62社に分担した表とそれぞれの担当者氏名を記した小冊子を受け取った。この資料に従って下部団体などを訪問すれば、景気がよくないので保障はできないが、1000万円くらいは可能であろうということであった。期待できそうな大口の団体から訪問を開始することにして、金融界では東京銀行協会と日本証券業協会、産業界では日本鉄鋼連盟、日本電気事業連合会、日本電機工業会、日本自動車工業会、電子情報技術産業協会、情報通信ネットワーク産業協会などを大橋委員と2人で訪問したが、月原、雨宮、坂田の各委員や井上 豪氏も参加した。またリガクやブルカーなどのX線関連の企業には大橋、坂田委員を含む何人かの委員で訪問して個別に寄付を依頼した。

訪問した各団体にはすでに恒例の行事や課題が予定されており、新しい課題を受け入れるには理事会の承認を得なければならないということであった。その成否はタイミングと総務部の説明にかかっている、加えて結晶学と団体との関係をサポートする理事が必要になるらしく、産業界に太いパイプが少ない結晶学会にとってはきわめて厳しい状況であった。結果を問い合わせても、なかなか返事が来ない。返事があっても辞退したいという内容が多かった。待った甲斐があっても、1年後の会議開催の直前に決まった場合もある。採択された場合には、その団体所属の中で関心のある企業のリストと分担金を記した資料をいただき、それに基づいて各社を訪問することになった。いくつかの企業へは指示に従って趣意書と依頼状を郵送した。日本分析機器工業会については、藤原宗一(元リガク常務取締役)や本多龍二(ファルマ・アクセス社長)にお世話になった。しかし結果は時勢の景気を反映しているようであった。そのような厳しい状況ながらも厚いご支援をいただき、ご尽力を賜った各団体および各企業の方々に感謝しています。

後半は関西に軸を移して大橋委員と甲斐氏が活躍した。とくに高輝度光科学研究センターの吉良爽理事長と川上哲郎会長に紹介していただいて、関西経済連合会(関経連)に募金依頼に訪問した。関経連では会長および副会長が所属する10業界団体のリストを提示され、すでに募金依頼の文書も送られているということであった。このリストに基づいて、大橋委員と甲斐氏が各業界団体を訪問して募金を依頼した。またすでに募金依頼していた大阪万博協会にも両名が訪問し、改めて募金を依頼した。

国際会議を大阪で開催することもあり、関東よりは好意的であった。

藤嶋昭日本化学会会長から大橋委員に、東京応化科学技術振興財団(藤嶋理事長)に寄付依頼するようという助言をいただき、早速応募したところ、満額の援助をいただいた。

これに先立って、2005年のIUCr大会(Firenze)、2006年のECM23(Leuven)、2007年のECM24(Marrakech)では、展示企業各社の責任者に会い、連絡先などを聞き出しておいたので、十数社の海外企業に寄付金および若干支援の依頼状と広告や企業展示とコングレスグッズによる支援の依頼状を送った。多くの企業から後者に対する多大の貢献をしてくれたと聞いている。前者については、現金による支援の慣例が少ない外国企業の中で、Oxford Diffraction社から反応があった。この企業は2007年度年会(CrSJ2007)でも広告支援してくれた企業であるが、今回は展示および広告に加えて若干参加支援金として\$5000を寄付していただいた。

以上の結果をまとめたのが表2である。景気が低迷する時期とはいえ、幸いにも総額2,000万円以上を集めることができた。世界経済が急激に悪化している今と比べると、国際会議の開催が2009年でなかったことは幸いであった。上記の募金活動では、進め方や交渉過程において、柊川正也(元シャープ常務取締役)、早藤貴範(元ソニー研究センター長、現関西学院大学理工学部教授)

表2 寄付をいただいた団体および企業名。(Donators.)

団体
日本製薬団体連合会
財団法人大阪観光コンベンション協会
独立行政法人日本万国博覧会記念機構
財団法人内藤記念科学振興財団
財団法人東京応化科学技術振興財団
企業
株式会社リガク
Oxford Diffraction Ltd.
株式会社島津製作所
松下電器産業株式会社
近畿日本鉄道株式会社
シャープ株式会社
住友金属工業株式会社
関西電力株式会社
株式会社日立製作所
ダイキン工業株式会社
ファルマ・アクセス株式会社
神津精機株式会社
オムロン株式会社
アストラゼネカ株式会社
富士電機ホールディングス株式会社
日本電気株式会社
富士通株式会社
横河電機
株式会社ルネサステクノロジ
沖電気工業株式会社

をはじめ、多くの方々からお力添えしていただきました。企画小委員会を代表して、ご支援していただきました団体および企業、ならびに関係者各位のご尽力に感謝の意を表します。

学術会議対応小委員会

本小委員会の活動は、外務委員会傘下の小委員会として組織化される前に、結晶学研究連絡委員会としてすでに実体が存在した。当時の委員会活動の最大の眼目は、IUCr大会の誘致である。外務委員会報告としては、多少範囲を逸脱するかもしれないが、大変重要なことなので、それについても記述することにする。それにより、本小委員会が結晶学研究連絡委員会からの連続した活動であることが理解できると思う。時を同じくして、学術会議の歴史的な改革が重なったので、この間の複雑な事情の一端を記しておくことは、結晶学会としても意味のあることと思う。

2005年フィレンツェ開催が決定したあと、2008年開催のIUCr大会を日本に誘致するかどうかの判断が議論されたのは、日本学術会議第4部結晶学研究連絡委員会の第18期第2回の委員会（2001年3月6日開催）の席であった。日本が立候補するかどうかは、同年7月にロスアンゼルスで開催されるIUCrのExecutive Committeeまでに決める必要があった。話し合いの結果、従来の方針に従って立候補することになり、開催候補地として名古屋、横浜、京都、大阪、神戸の名が上がった。その後、日本結晶学会の評議員会でも2008年IUCr大会の日本招致が了承され、坂田研連委員長と佐々木渉外幹事が中心になり、2000人規模を想定した開催地の実地調査を行い、見積書と提案書を入手した。同年7月3日開催の第3回結晶研連委員会で、会場規模が適正であること、設備が新しく充実していること、全館貸切ができ会議の運営に好都合なこと、利用料金がほかと比べ安いこと、主要航空会社の航空券割引制度があること、都心にあり会場へのアクセスに問題がないこと、担当者の対応が丁寧なことなどを勘案した結果、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）を会場とする案が承認された。結晶学会評議員会でも了承され、当時の田中通義IUCr副会長により8月のヨーロッパ結晶学会中に開催されたIUCr Executive Committeeで誘致説明が行われ、日本招致の意思表示がなされた。その年の秋のAsCA会議（バンガロール）の後にシェンクIUCr会長とラーセン幹事が来日され、大阪国際会議場を視察された。また、そのときまでに、IUCr協賛を依頼したすべての学協会から快諾するとの回答が集まった。

そして2002年8月になり、第19回IUCr大会がジュネーブで開催された。大阪コンベンションビュローの協力を得て、1000部の誘致パンフレット、ポスター、地図、コースターなどの資料が特設ブースで配布され、甲斐庶務日本結晶学会誌 第51巻 第1号（2009）

幹事や竹市未帆さん、大阪国際会議場から派遣されたピーターズさんを中心に次は日本だという雰囲気作りがなされた。そして本番の8月8日開催の総会で、日本誘致の演説が坂田委員長によってなされ、ついにIUCr2008の大阪招致に成功した。^{1),2)}

日本結晶学会を中心に協賛学協会の協力を得る中で、2002年12月10日開催の第7回結晶研連委員会で準備組織委員会が立ち上がった。国際プログラム委員長は1つ前の2005年フィレンツェ大会からプログラム編成に携わる必要があった。そのため、第1回準備組織委員会（2004年10月23日開催、大橋委員長）で、藤井プログラム委員長が選出された。IUCr2005期間中には、甲斐研連委員がIUCr2008大阪大会の開催場所や日程についての日本案をExecutive Committeeや第20回総会で発表し、大阪大会が正式決定された。³⁾その後、2005年12月5日に第1回IUCr2008組織委員会（月原委員長、甲斐事務局長）が開催された。この間の準備委員会や組織委員会の活動は、別稿のIUCr2008報告書に詳しく述べられている。⁴⁾

このように大阪大会の準備委員会はが始動したが、IUCr国内委員会としての結晶研連には、1つの重要な役目が残っていた。すなわち、学術会議へのIUCr2008共同主催の申請である。この申請時期が学術会議の組織改革と重なるため、第19期結晶研連（佐々木委員長）での最重要な懸案事項となっていた。組織改革の中で研連組織が消滅することになったため、IUCrへの国際対応窓口や新分科会の新設依頼とともに、IUCr2008大阪大会を日本学術会議共同主催で開催することの重要性和要望内容を申し送り事項にまとめて、第4部に提出した。フィレンツェ大会で大橋IUCr次期会長が決定したことと、IUCr2008に合わせIUCrの60周年記念シンポジウムを日本で開催するよう要請を受けていることも申し送った。

2005年10月1日から第20期日本学術会議が新しい組織形態でスタートした。第20期のスタートまで2008年度共同主催国際会議の募集は行われず、募集日程全体が非常に遅れ、た。そして、募集開始が11月中旬で11月末には締切という非常に慌ただしいものになってしまった。それさえも、事務局に事前連絡をお願いした中でのことであり、手引きや申請書類の暫定版が11月13日に送付されるという綱渡り状態であった。選定の基本方針を重視することや市民公開講座を加えることなどのアドバイスをもとに関係者で分担して書類を整え、日本結晶学会主催、日本学術会議共同主催の形で、結晶学会の大隅会長から日本学術会議への申請が完了したときには虚脱感を覚えた。

このときにはすでに、IUCr2008国際会議のホームページが立ち上がっており、学術会議の心証を良くしたと聞いた。その後、2006年3月1日にヒアリングがあり、タイミングよくIUCr分科会暫定連携会員に就任していた

大橋・甲斐・佐々木の3委員が出席し、甲斐委員を中心に国際会議の説明を行った。それと相前後して、第20期の化学委員会の中にIUCr分科会が立ち上がり、ヒアリングの3日後の3月4日に第1回IUCr分科会(栗原委員長)が開催された。そして同年6月13日には、学術会議から念願の共同主催の内定通知を受け取った。これ以降の学術会議事務との対応は、胃の痛い思いをされながら甲斐事務局長が一手に引き受けられた。一方の学術会議においては、大橋委員が連携会員に就任し、同年10月4日開催のIUCr分科会で委員長に選出された。さらに幸運なことに、結晶学分科会が化学委員会と物理委員会との合同で設立された。

2006年7月8日に第1回IUCr2008組織委員会の幹事会(月原委員長)が開催され、外務運営委員会などの組織が編成された。外務運営委員会の中に学術会議対応小委員会が設置され、黒田玲子・佐々木 聡(委員長)・佐藤(勝)昭の3名の委員で活動をスタートした。当初はこの小委員会で市民公開講座の企画立案を担当することになっていたが、新たに市民公開講座小委員会(吉朝委員長)を立ち上げてもらった。これにより公開講座の企画が強力に展開され、IUCr2008大阪大会成功の一翼を担ったことは非常にありがたかった。学術会議との共同主催関連では、2007年度に入って早々に、国が正式支援する国際会議として全閣僚に口頭で了解をとる閣議決定がなされた。そして2007年6月1日には、月原結晶学会会長と金澤学術会議会長との間で、国際会議開催のための合意

書が締結された。この合意書の中では、市民公開講座開催の担当委員を明記することと、学術会議の国際会議小分科会委員候補者1名の推薦を求められた。この小分科会委員には、IUCr2008組織委員会幹事会(学術会議でいう運営委員会に対応)に属す学術会議特任連携会員という条件があり、学術会議対応小委員会委員長が推薦され、学術会議推薦の石川幹子委員とその任にあたった。2008年3月30日には早々に、福田康夫内閣総理大臣による開会式メッセージの最終版が送られてきた。そして本番のIUCr2008では、小委員会として土井副会長をはじめとする学術会議関係者との打ち合わせやお世話を行った。また、黒田委員が開会式の司会という大役を務められた。

サテライト会議小委員会

IUCr2008のサテライト会議は、表3にまとめられているように、9つの会議が開催された。IUCr2008の会期とは重複しないことがサテライト会議の原則であり、本会議の会期の前に開催されたものが7件、会期後に開催されたものが2件であった。会議の内容としては、いずれも専門分野に特化したテーマを扱っているが、先端の研究成果が議論されたものと、その分野での教育的要素が強いスクール形式のものとの両方が企画され、結晶学にかかわる幅の広い分野が含まれるものであった。

外務委員会での議論では、結晶学に関係する多くの科学者がIUCr2008に集まる機会に、専門性が高い分野でのより深い議論を行うことができるサテライト会議を多く

表3 IUCr2008で開催されたサテライト会議(会期の早い順)。(Satellite Meetings of IUCr2008.)

サテライト会議名	会期	会場	オーガナイザー ¹⁾ (敬称略)	参加者数 (国外参加者、 内数)
2008 Kyoto Crystallographic Computing School - Sharing our knowledge -	8月18-23日	関西セミナーハウス (京都)	姚閔(北大), 中川敦史(阪大), 他4名	54(32)
The 6th International Conference on Borate Glasses, Crystals and Melts	8月18-22日	イーグルひめじ(姫路)	梅咲則正(JASRI/SPring-8) ²⁾	119(50)
X-ray and Neutron Techniques for Nano-Structural Research	8月20-22日	SPring-8(兵庫県佐用)	八木直人(SPring-8/JASRI) ³⁾	60(25)
XAFS Tutorial for Crystallographers and Beginners	8月20-23日	KEK国際交流センター (つくば)	朝倉清高(北大)	57(13)
Molecular Crystals Exhibiting Exotic Functions	8月21-22日	千里ライフサイエンス センター(豊中)	小林昭子(日大), 杉本豊成(大府大), 他5名	93(13)
Neutron Protein Crystallography (NPC)- Current Status and Future Prospect	8月21-22日	日本原子力機構・テク ノ交流館リコッティ (茨城県東海)	新村信雄(茨城大), 他2名	42(11)
Symposium on Organic Micro- and Nano-Crystals	8月22日	東北大多元研(仙台)	中西八郎(東北大), 他1名	52(12)
Development of Advanced Instruments for New Electron Microscopy and Diffraction	9月1-2日	名大(名古屋)	齋藤 晃(名大), 田中信夫(名大), 他1名	87(29)
Powder Diffraction on Proteins- Current Status and Future Prospect	9月1-2日	京都工繊大(京都)	三浦圭子(SPring-8/JASRI), 他7名 ⁴⁾	60(18)

1) 紙面の都合でここには責任連絡者(代表世話人)の方のみ記載

2) International Organizing Committee (10名)

3) 公式のオーガナイザーはIUCr Commission on Small-Angle Scattering

4) International Organizing Committee (13名)

開催して、本会議では十分にカバーできない側面を補い、延いては本会議への参加者増加にもいくらかの効果を期待したいとの考えから、サテライト会議の開催を積極的に推奨することとなった。その実現には、サテライト会議のオーガナイザーの負担軽減につながる財政面からの援助が重要であるとの認識から、会議準備資金（初動資金）の補助、若手参加者への参加費援助を実施することが、組織委員会の関係方面のご努力によって、順次決められていった。IUCr2008のサテライト会議である以上、本会議との運営指針等の協調や意思疎通が重要であるので、本サテライト小委員会としては、各サテライト会議の世話人の方々との連絡を維持して、その準備進捗状況の把握に努めた。そのような状況下、IUCr2008開催のほぼ1年前には、開催の正式決定がやや遅れたCrystallographic Computing Schoolを除いたすべてのサテライト会議の開催が本決まりとなり、その後はサテライト会議の世話人の方々との事務的な連絡調整が本小委員会の主な職務となった。各サテライト会議のプログラムについてはそれぞれのオーガナイザーにお任せしており、その意味からも、本会議のwebページには限られた情報だけを掲載して、詳細については各サテライト会議固有のwebページを開設していただいた。このあたりの実務については、広報小委員会の菅原洋子委員長に大きなご尽力をいただいた。

開催された各サテライト会議の世話人の方々に伺ったところ、それぞれが成功裏に会議を終えられ、その科学的な成果からも、またIUCr2008のサテライトとしての意義からも、十分にその目的を達成できたという感想をおもちであった。事実、それぞれが想定した会議の規模には大小があったが、表3にあるように、多くの海外参加者を含めて十分な数の参加者があり、総じて若手の参加者も多く国際色が豊かであったと伺っている。組織委員会からの会議準備資金や若手参加者への援助が、十分に機能したことに言及された世話人の方も多くおられた。また、準備期間における本小委員会の対応が円滑であったと評価して下さった方もいて、胸を撫で下ろしている。しかしながら、これらのサテライト会議の成功は、オーガナイザーとくに代表世話人の方々の献身的なご努力に負うところが大きいことは言うまでもない。深く感謝の意を表したい。

市民公開講座小委員会

IUCr2008では、運営費の一部を日本学術会議により負担して頂いた。会議内容を広くわかりやすく啓蒙することを日本学術会議は求めており、一般市民や教員・学生・生徒を対象とした公開講座などの開催を同会場で同時期に開催することが好ましいとしている。そこで、吉朝委員を委員長として外務委員会内に市民公開講座小委

員会を立ち上げ、5日間に及ぶ講演・体験コーナー・出前授業（スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）校に絞った）などを行った。これほど、充実した市民公開講座を開催したことは、IUCrとしてもきわめて稀なことで、IUCr2008の大きな特徴になっている。その割には、結晶学の専門家である一般参加者には、あまり知られていないように思うので、どのような市民公開講座が行われたのかについて、事実関係に重点を置いてここで記述することにする。

市民公開講座小委員会は、田中高紀（阪大産研）、竹市未帆（大阪大学）、加藤賢一（大阪市立科学館）、嘉数次人（大阪市立科学館）、半田 孝（元大阪府立少路高校）、奥寺浩樹（金沢大学）、沼子千弥（徳島大学）、奥部真樹（東京工業大学）、佐々木 聡（東京工業大学）、井上 豪（大阪大学）、宮原郁子（大阪市立大学）、吉朝 朗（熊本大学）で構成された。そして、市民公開講座は、（主催）国際結晶学連合、日本結晶学会、日本学術会議、（共催）大阪市立科学館、大阪市立大学大学院理学研究科、大阪大学蛋白質研究所、大阪大学産業科学研究所、大阪大学大学院工学研究科、熊本大学大学院自然科学研究科、東京工業大学応セラ研、（後援）大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、という体制で実施した。

公開講座では、一般の方々にわかりやすく、結晶学のこれまでに果たして来た役割と未来、基礎学問分野としての重要性、その身近さや奥深さなどについて、多分野多方面にわたる講師の方々により紹介していただいた。また、学生や生徒に次世代の科学者を目指してもらうためにも、最新の話題や先端技術活用による今後の発展性などの情報も折り混ぜた。さらに、科学教育のレベル向上ため、中学理科教員・高校各教科担当者（物理・化学・生物・地学）の集まりにも参加を依頼し、教育委員会には後援をいただいた。会場のグランキューブ大阪には大阪市立科学館が隣接しており、一般への科学啓蒙に普段から努力されている科学館の職員や友の会委員の方々にも協力いただき公報宣伝活動や数々の協力をいただいた。

このような中で、2008年8月23日（土）から27日（水）にかけて、「第21回国際結晶学連合会議（IUCr2008）における一般市民向けの市民公開講座」と題して、市民公開講座を実際に開催することができた。開催場所は、実際にIUCr2008が行われた大阪中之島のグランキューブ大阪（国際会議場）大～小ホールのほかに、出前授業校であった。参加対象は高校生・大学生・一般市民（保護者同伴で小中学生参加も可）であり、822名の参加のべ人数に上った。表4にその内容を概略する。また、国際結晶学連合結成60周年記念行事の公開と歴代会長陣による講演が、大橋裕二国際結晶学連合会長の協力により実現できた。英語による講演には、同時通訳もしくは座長によるわかりやすい日本語解説を行った。前回会議で好評で

表4 IUCr 公開講座の内容. (Open Lectures of IUCr2008.)

平成20年8月23日(土)	国際結晶学連合成60周年記念行事の公開
Ted Baker (1996~1999年度会長)	「結晶学と私たちの周りの世界」(日本語同時通訳)
Bill Duax (2002~2005年度会長)	パネル展示「写真で見る国際結晶学連合会議の60年」(公開講座委員による日本語説明付)
平成20年8月24日(日)	
細矢治夫(お茶の水大名誉教授)	体験コーナー「折り紙による結晶模型制作と芸術や文化の中の対称性」
Andre Authier (1990~1993年度会長)	「X線回折の歴史,物質の構造をどんどん細かくして観察してみよう」(座長と解説:松下 正)
平成20年8月25日(月)	
細矢治夫(お茶の水大名誉教授)	体験コーナー「折り紙による結晶模型制作と芸術や文化の中の対称性」
Theo Hahn (1984~1987年度会長)	「2500年にわたる科学や芸術や音楽の世界には対称性が存在する」(座長と解説:田中通義)
平成20年8月26日(火)	
奥部真樹(東京工業大学),吉朝 朗(熊本大学)	SSH高校出前授業「天然結晶の不思議な性質」
吉朝 朗(熊本大学)	体験コーナー「人工結晶に触れてみよう:結晶の不思議な性質」
Henk Schenk (1999~2002年度会長)	「原子や分子を見るために結晶にX線を当ててみよう.そこから何が得られるだろう」 (座長と解説:坂田 誠)
平成20年8月27日(火)	
吉朝 朗(熊本大学)	体験コーナー「人工結晶に触れてみよう:結晶の不思議な性質」
Philip Coppens (1993~1996年度会長)	「生物の中でも試験管内の物質でも基本単位として存在する分子の性質について,結晶学が私たちに教えてくれること」(座長と解説:鳥海幸四郎)

あった折り紙を用いた体験コーナーや結晶のもつ不思議を数々の試料により体験できるコーナーも準備した。世界有数の研究学術団体成立の歴史や研究の最前線,学問の魅力,国際会議の雰囲気を経験いただけたと思う。

以上見るようにきわめて充実した市民公開講座を実施したことを紹介した。このことはIUCr2008が結晶学の専門家による専門家のための国際会議という枠を、少し踏み出して市民を巻き込んだサイエンスの啓蒙活動の場でもあったことを意味している。このような活動に対して、歴代のIUCr会長がきわめて積極的であったことが印象的に残っている。

おわりに

IUCr2008は、参加者が2,500名を超えるなど大成功裡に終了することができた。外務委員会は、市民公開講座小委員会など一部を除いて、会議が始まる前に主な活動を終了した。そのために、一般の参加者には必ずしも活動内容が知られているわけではないように思う。この報告書にまとめて見ると、さまざまな活動をしてきたものだ、との感慨をもつ。幸い、IUCr2008は現下のような厳しい世界不況の影響を、あまり受けずに終了することができた。もし、このような不況下での開催であったのなら、いっさいの努力が実を結ばなかったかもしれないと思うと、安堵の胸を撫で下ろすばかりである。100年に一度と言われる現在の世界不況は、例外的状況かもしれないが、その嵐の前に、かろうじて滑り込んだのは、一種の幸運であろう。

通常の景気状況でもIUCr2008のような大きな国際会

議を成功させることは、並大抵のことではない。外務委員会が、その一翼を担えたことは大変に嬉しく思う次第である。外務委員会ならではの感想を言うならば、誘致に先立って会議場の選定を行ったことを思い出す。学術会議対応小委員会のところにも書いたが、大阪国際会議場を選んだ理由として、全館貸し切りが可能であったことである。誘致に先立って調べたほかの国際会議場は、IUCr2008には余りにも大きなため、例えば、メインホールは開会式以外の日には借りることができず、ほかの目的に使われることになる。このような大きなホールの使用状況を見ると、ほかの目的に使われると言うことは、有名なバンドのコンサートに使われる可能性が大きいと言うことを意味する。国際会議をしているのか、コンサート会場なのかわからない雰囲気になってしまつては、国際会議も台無しであろう。

関係者の努力だけでなく、いろいろな幸運もあって、と言うよりは不運に見舞われなくてIUCr2008が無事終了した。次に、IUCrが来るのは何時のことになるかわからないが、その時の一助になることを夢想着、外務委員会からの報告をまとめた。お世話になった方々が、余りにも多いため一々名前を挙げることはできないが、大変感謝する次第である。

文 献

- 1) 坂田 誠:日本結晶学会誌 **44**, 324 (2002).
- 2) 佐々木聡:学術の動向 **8-11**, 90 (2003).
- 3) 佐々木聡:日本結晶学会誌 **47**, 409 (2005).
- 4) 甲斐 泰:日本結晶学会誌 **51**, 6 (2009).